

# Sj

人とクルマのいい関係をめざして

1

2007 JANUARY

- 編集室：〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1  
本田技研工業株式会社  
安全運転普及本部内  
電話 03(5412)1736
- 編集人：河野光彦
- 年間購読料：1200円(定価1部100円・消費税込)
- ※郵便振替 口座番号：00170-7-173273
- ※加入者名：(株)アストクリエイティブ  
安全運転普及本部係

## 今月の スポット

人間の根源的な喜びは、  
自己実現だと思います。  
自分がそこにいた、自分が  
これをやったという達成  
感、自己実現の喜びを際  
立たせる会社がHonda  
だと考えています。

(対談より)

### CONTENTS

- 新春対談：The Power of Dreams ..... ①
- 世界へ、未来へ、夢へのチャレンジ!
- TRAFFIC ADVICE ..... ④
- HDS 山野哲也スポーツ&セーフティ・レディーススペシャル/  
スポーツドライビングを通してセーフティマインドを身につける
- TOPICS ..... ④
- 交通教育センター・レーンボー福岡・リスクマネジメントセミナー/  
組織内の安全体制を構築することが企業に求められている
- NEWS REVIEW ..... ④
- 2006年ホンダ安全運転普及本部「年末ご挨拶会」
- 活動短信/交通教育センター 12月
- OPINION ..... ⑤
- 吉田信彌/わかっていてもその通りに実行しない、言行不一致な  
人間の特性を認識することが重要
- HOW TO LEAD ..... ⑤
- 山梨県立山梨園芸高校/Honda ライディングシミュレーターを  
活用して生徒と対話する教育
- DOCUMENT EYE (目) ..... ⑥
- 信号機のない交差点で高齢歩行者の左右確認状況を観察する

## 新春対談：The Power of Dreams



# 世界へ、未来へ、夢へのチャレンジ!

**福井威夫**

本田技研工業株式会社社長

**鈴木亜久里**

SUPER AGURI F1 TEAM 代表

モータースポーツの世界の頂点であるF1への参戦を、自らF1チームを設立・運営し、実現させた鈴木亜久里氏と、  
「The Power of Dreams」を掲げ、より豊かなモビリティ社会の実現に挑む福井威夫社長のお二人に、  
世界へチャレンジする志、夢を実現させる力、F1という最高峰のレースの体験を踏まえた安全への考え方などを語り合っていた。



# 今、ここから未来へ向かえば可能性があると考える それが夢を実現させる力です

「夢を原動力にして世界に向かって果敢にチャレンジをされているお二人にとつて、夢を持つ、希望を持つとはどのようなことなのか。夢や希望を実現させるためには、どのような力が必要なのか、新年の抱負も含めてお話をいただきたいと思います。鈴木さんはF1チームのオーナーとなり、準備に2年も3年もかかると言われるF1への参戦をわずか150日で実現したわけですね。」

鈴木 ちよつと無茶だったところもありますね。きつかった面もありましたが、自分はF1チームのオーナーとして、絶対に参戦すると決めていましたから、迷いはありませんでした。30歳までにドライバーとしてF1に参戦し、35歳で引退、45歳までにF1のオーナーになる、そのためにはまず日本でレースをやり、チャンピオンを獲得してから、ヨーロッパでのレースに挑戦しようと全部決めていました。すべてがだめになってしまうかもしれないけど、いずれにしろどこかで死ぬのだから、死ぬまでに勝負しようと思ったのです。

福井 私たちとの共通点があるとすると、ホンダという会社もそうだし、私のパーソナリティもそうですけど、どこか楽観主義的なところがある。今、ここから未来に向かえば可能性がある、それを考えると何かできそうな感じがしてくるわけです。

鈴木 F1チームを立ち上げようと決めたのは2005年9月。自分で大きな波が来ていることはわかっていました。絶対に乗れる波が来ている。しかし、その時に自分が持っているのがサーフボードだと思っていたら、普通の板だったということになり、問題はたくさんありました。でも、波に乗ると言って海に出てしまったのだから、何とか乗り切らなければいけないと思い、一所懸命に波に乗ったのです。

「チャンスが来た時、敏速に行動できたのは、夢を実現したいという強い意思があったからでしょうね。」

鈴木 タイミングとしては、あの時に意思決定するしかなかったのですが、それにしても怖かったし、胃も痛くなりました。寝ていても胃が痛くて目が覚めてしまう。

福井 知らない世界に入っていく怖さでなく、知り抜いた世界に入っていく怖さ。そ



鈴木亜久里 Aguri Suzuki

1960年東京生まれ。72年カートレースデビュー。88年全日本F3000シリーズチャンピオンを獲得した後、89年ZAKSPEED YAMAHAよりF1参戦。90年ESPO LARROUSEよりF1参戦、F1日本GPにて日本人初の3位入賞。97年「ARTA」F1プロジェクトを発足させ、若手ドライバー育成にあたる。2003年アメリカ最高峰のレース、インディーカーシリーズに参戦。06年SUPER AGURI F1 TEAMを発足、F1に参戦。

こがどんなにきついか自分で身をもって体験したわけですね。

鈴木 きついいことは、わかっていました。それでも、とにかく行ってしまえ、ここを逃したら次はない、何とか行けるといいう気持ちはずっとありました。

福井 怖いけど、それを恐れないところがどこかあったのだと思います。楽観的であることは重要なのですが、今の日本にはそれが無いように感じます。例えば、私が入社した当時のホンダという会社は、はっきり言うとおびえるかもしれないようなイメージがあったわけですね。あの当時のホンダは、ある程度楽観的な人間でないと入社しなかったでしょう。まず最悪のシナリオを想定して、その覚悟をして、その上で一所懸命努力すればいいと考えていました。

## わからないからこそ、 一歩踏み出す

鈴木 22歳の頃に父から言われたことがあります。「一歩進まないとも進まないよ」と。「あなたがこれまで生きてきた世の中のことだけで、プラスかマイナスか判断し

て、やるかやらないかを考えていると思うが、その先にはいろいろな人との出会いもあるし、いろいろな物事の広がりがある。あなたがまだ知らない世界は山ほどあって、一歩踏み出して見ないと、その世界はわからないままに終わってしまう」という父の話がずっと頭に残っていました。

福井 父親からそういうポジティブな考え方を教えてもらったわけですね。今の教育は、「こうしたら危ないからやらないほうがいい」といったネガティブな方向に進んでいるように思います。だから1%の可能性を見ず、先に99%のリスクを考えてしまうから何もできない。日本の社会には、一流の大学を出て一流の会社に勤めればよいという考え方も確かにあります。親にしてみても、世の中がそうだから、わが子どものような道を歩ませたい、それが子どものためだと思いついて入っているのでしょうか。でも、実際にはそうではない、本田宗一郎のように自分の夢を実現させるために会社を起こしたり、無茶だと言われた様々なことにチャレンジし、結果を残す人もいるわけですから、いろいろな選択肢があつていいのにな、生き方がワンパターン化しているという傾向を感じます。

鈴木 海外で若者たちと話す時、自分が楽しいことはみんなと違うことでも楽しいと思つて、それをクリエイティブしていく。これが日本にはないですね。教育も右向け右と言われた時に右向き子どもは良い子で、よそを向く子どもは悪い子になってしまうわけですね。海外の教育の仕方は一人ひとりの個性を伸ばすことを前提に、必ずしも全員が同じ方向を向いていなくても悪い子ではないということが基本にあると思う。私の子どもはフランスの学校で勉強していますが、充実しているようです。イジメなどもないし、とにかく学校が楽しいと言っています。その代わり、自分が責任を持たないと脱落するわけで、そのあたりが日本とは違うように思います。

福井 人間はよりいい条件を与えていくと、それに甘えて、生命力がなくなっていくという感じがします。それが人間の不思議なところですね。

鈴木 レースのプロジェクトで、若い優秀なドライバーにいい環境を与えてあげれば、いい条件でスタートするから、もっと伸びるかと思うとそうではない。私たちがいい環境を作つてあげるほど、成長しなくなります。貧乏という意味ではなく、ハン

グリーになることが大事だと思います。裕福でもハングリー精神を持った人はいるはず。今の教育もそうですが、みんなが敷いてくれたレールの上を歩かせるためだけのシステムに、日本全体がなっているような気がしています。

福井 ハングリーになると言っても、自分の利益のためだけにハングリーになってはいけないと思います。何らかの志があるハングリー。その志は自分以外の人のためだったり、社会のためだったり、小さなことでもいい。それが原点にあつて、何とかしたいという思いでハングリーになることが重要です。本田宗一郎は「自分のために働け」と言いましたが、仕事は一所懸命やらないとうまくならないし、それは結局、人のためになり、自分のためになるということだと思つています。それを勘違いして、自分だけ良ければいいとなりやすい。そうすると、あるところで自分もみじめになるし、ハングリーさもなくなくなっていきます。

鈴木 今回、いろいろ動く中で、もう一つ、父に言われたこと思い出したことがあります。「水を入れるなら自分が飲むために、自分のコップを一杯にすればいい」と考えたんだ。みんなが楽しんで、遊べるプールの水を一杯にするようにものごとを考えなさい」と。どこの業界も同じだと思つていますが、いつも自分の飲む水のことだけを考える。ちよつと水が溜まった時、それを呼び水にして流れをつくらなければいけないだけだ、だいたい自分たちのためにコップの水を飲んで終わってしまう。自分のことだけを考えたなら絶対にうまくいかないと思つていました。

福井 ハングリー精神は、やはりレース活動で鍛えられます。ホンダが今、F1に挑んでいるのも、そういう目的があります。そこでは参加すればいいという考え方で鍛えられない。やはり、勝たなくてはならない。だから、限られた時間の中で必死になるわけです。やるべきことを全部やつて、いかにチームワークを作るか。それを経験するわけです。従業員に、レース活動は道場だと言っています。これがホンダの将来の原動力になってくると思つています。



# 新春対談: The Power of Dreams「世界へ、未来へ、夢へのチャレンジ!」

## 安全をめざして 努力することが原点

— 日本語の「安全」という言葉はしばしば「無難に」と同じに、消極的な意味でとらえられることも多いようですが、F1チームを運営するという使命をまっとうするには、安全への積極的なチャレンジが必要になると思います。その意味での安全についてお話しいただけますか。

鈴木 ドライバー時代に「よくあんな危ないことを命懸けでやっているな」と言われていたわけですが、命懸けで仕事をしているとは思っていませんでした。無茶とか無謀なことは一つもしていませんからです。すべてにおいて、リスクをきちっと考えて走っていました。ドライバーもレースを運営するスタッフも、すべての人が組織的にそのことを考えているから、レースをしていても危険ではないのです。そういうお互いの信頼感のうえで、自分の限界に挑戦することが出来ます。スピードを遅くして走れば安全かと言えば、そうではないことは多くの交通事故が起きていることでわかりますが、安全とか危険、無茶とか無謀でないということとは人の心の持ち方ですべて変わってくると思います。

福井 レースは危なくないのですが、事故が起きることはあります。そのうえで、どのように人を傷つけないようにするか、人の命を守るか、考え抜いていく。救急体制までものすごくしっかり整備されています。クルマがスピンすること自体が危ないからいけないと言ったら、レースは成り立たないわけですね。道路交通でも同じで、絶対に安全でなくてはいけないということではなく、信号を守っていても事故は起きるといふところから始めなくては行けません。ですから、自動車メーカーとして衝突安全を一所懸命、研究開発しているわけです。ぶつからないクルマというのが、私たちの夢ですが、当面、クルマはぶつかることを前提にして、その時の被害を最小限にとどめようというのが人間の英知だと思います。これだけのクルマを運転したら、どれだけのエネルギーがあつて、ぶつかったら

らこうなる。その上で、居眠りや飲酒などで事故を起こしたら自分の責任になること、自分をコントロールすることを徹底的に教える必要があります。

鈴木 日本で感じるのは、危ないから川で遊んではいけない、山へ行つてはいけない、何もしないようにして勉強させてあげればいみじいところがあります。しかし、川に行けばまた新しいことも知るだろうし、山へ行けば楽しいこともわかるだろう。その可能性を危ない、近づくな、ですべてブロテクトしてしまうと、夢など持てなくなりますね。

福井 例えば、安全という概念で考えても、絶対安全というのは基本的には存在しません。欧米などに行くと「100%安全? そんなものはありません」とはっきり言われます。だからこそ、安全をめざして努力することが原点なのです。

## 自己実現の喜びを力に

— お二人にとって、2007年はどのような年にされたのでしょうか。

鈴木 やはりF1で大きく飛躍したい。世界で認められる、戦えるチームに育てて

きたいと思っています。昨年、サーキットのパドックを歩いているいろいろなチームを見て、「俺はこんなすごいところに来てしまったんだ」とあらためて感じました。例えるなら、ジェット戦闘機で空中戦をしている世界に、ただ一人竹槍を持って飛び込んで行ったような感じですね。だから、2007年は竹槍でなくプロペラ機で空中戦ができるぐらいにならないといけない(笑)。そういう気持ちで、自分たちのできることを一所懸命やり、1台でも前へ行つて、い形で戦えるようにしていきたいと思っています。

福井 毎年毎年、ホンダという会社は進化していくことが重要なのですが、私が2007年にこうしたいと思うのは、ホンダの原点で創業商品である二輪事業を元気にしていくということ。グローバルに考えると、やはり日本の二輪が生産も販売もしっかりしなくては行けません。したがって、浜松が創業の地ですが、それにこだわらず、日本の二輪の生産体制をいかに進化させるか、強化するかという観点で、熊本に二輪生産を一本化しました。その実現に向けて、今年具体的計画が進む年になります。例えば日本のマーケットでは、団塊の世代

はバイク好きですから、そういう人たちが乗りやすい環境とか、新しいコンセプトの二輪をホンダが生みださなくてはだめだと思つています。軽自動車や自転車に移った方々にもう一度、二輪にも乗っていただく。これを実現するのがホンダだと思います。

— バイクは元来な社会を象徴する商品のようなどころがあると思いますが、若者が乗らなくなる傾向がありますが、どうしたら元気を伝えていけますか。

福井 元気がないと決めつけずに、元気が若者もいることに目を向けてほしいですね。例えば最近、海外青年協力隊など、海外でボランティア活動をする若者がたくさんいます。昔よりも世界に貢献している日本の若者が、ものすごく増えていると思います。それは一つの明るさです。人間の根源的な喜びは、自己実現だと思つています。自分がそこを、自分がこれをやったという達成感、自己実現の喜びを際立たせる会社、自分がホンダだと考えています。全員が「自分はこんなことをやったんだ」と言えるような企業にしていきたい。これが人間尊重の原点だと思つています。そういう環境に常にしていく努力をしないと、放っておくと企業の組織はどんどん間違つた方向に行つて

しまう。組織力や管理というものは個人を小さくする機能をもっているから、それをいつも破壊しながら、個人の自己実現を際立たせるマネジメントをしていく限り、活力はなくなると考えています。

鈴木 私のチームのスタッフは150人ですが、私の役割は自分の行きたい方向をみんなに明確に示して、働きやすい環境を作ることです。彼らをプロだと思つて採用していますので、やりたいように思いつきやりなさいと言つています。それで、私がめざしている結果を出してくれれば満足しますし、困つた時には全員で解決します。みんなが働きやすい環境を作れば、一人ひとりが自分の夢に向かって元気になり、がんばってくれると考えています。2007年の目標は表彰台に上がることです。

福井 ドライバーとして上がった表彰台に、次はオーナーとして上がる、いい目標ですね。自分がやりたい夢とは自己実現で、そういうみんなの夢を背負つて世界に挑戦しているわけです。そういう部分では、元気が出てくる方がたくさん増える。あれだけ応援してくれる方々がいるから、私ももちろんがんばろうと思つています。

— ホンダも鈴木さんのチームも、夢を持つてチャレンジしています。それを続けることが、存在を期待されるということにつながっていくと思つています。本日は、ありがとうございました。



## 福井威夫 Takeo Fukui

1969年早稲田大学理工学部応用化学科卒業後、本田技研工業に入社。  
87年ホンダレーシング社長兼本田技術研究所常務。  
90年同研究所専務。96年本田技研工業常務。  
98年本田技術研究所社長。本田技研工業専務。  
2003年本田技研工業社長、現在に至る。

## 読者プレゼント



鈴木亜久里さんのサイン入りSJキャップを抽選で6名様(白2個、青2個、紺2個)にプレゼントいたします。ご希望の方は、ハガキまたはeメールに住所、氏名、職業、電話番号、希望のキャップの色、SJへの感想を記入の上、下記にご応募ください。  
応募締切: 2007年2月10日(消印有効)  
(宛先)  
〒107-0062 港区南青山3-4-7 第7SYビル6階  
株式会社アストクリエイティブ「SJ読者プレゼント」係  
(eメール) sj-mail@ast-creative.co.jp  
※なお、当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。